

山本正三郎は、明治三十年七月、本校彫金科卒業。明治三十二年に出身地香川県の高松市で美術工芸品製作工場を起し自営するが、明治三十五年八月、金属美術研究の目的でニューヨークへ渡航する。銀器で知られたゴーハムの製作工場などで実際の仕事に従事しながら研究を続けた。ロードアイランド州立図案学校夜間部にも一時籍を置いた。明治三十七年から四十年まで豊商務省海外実業練習生。四十一年に帰朝し、東京府立工芸学校教諭となる。各種工芸美術展で受賞、東京勸業展覧会などの審査員を歴任。また、独自に工場も運営、大札記念の各種献上品の製作にもたずさわり、その実力が広く知られることになった。

#### ⑥ 装飾美術家協会

柱人社(738頁)の運動を社会的な立場に持っていかうと結成した一つの団体が装飾美術家協会である。結成のための第一回の会合は、高村豊周の自宅で、岡田三郎助や長原孝太郎も参加して開かれた。会の名前は議論百出、結局、語弊もあるが岡田三郎助発案の装飾美術という語を用いることになり、大正八年六月、装飾美術家協会を結成。同年十月、第一回展を神田神保町の兜屋画堂で開催した。出品者は、岡田三郎助、渡辺素舟、長原孝太郎、藤井達吉、原三郎、西村敏彦、今和次郎、斎藤佳三、広川松五郎、高村豊周の十名で全員会員であった。出品作品は全部で三十一点でそれほど大作はなかったが、大新聞が紹介するなど華々しい反響があった。全七十二頁の展覧会目録を作り、最後に会則を載せている。その第一章に「本会は芸術品(OBJECT D'ART)を制作発表し、従来の所謂工芸美術品

の品位を高め、その帰趨を示すことを以て目的とす。」と書かれている。翌大正九年に、資生堂の二階で第二回展を開催し、第一回におとらずジャーナリズムの注目を集めるが、それ以後展覧会は開かれていない。事務能力の不足から自然消滅してしまった装飾美術家協会ではあるが、この二回の展覧会の成功は、沈滞気味だった当時の工芸界に新しい気運を呼びおこすことになった。

#### ⑦ 東京高等工芸学校設置決定

安田祿造らの運動(69頁)が効を奏し、大正八年に東京高等工芸学校新設が決定し、左記の報道が示すように設立準備が始まった。

#### ○工藝教育振興

##### 工藝校委員任命

文部省に於ける高等教育機關擴張計畫に基き大正八年度以降三ヶ年の繼續にて東京芝浦埋立地に創設すべき高等工藝学校は其の目的とする處我國現在の工業界に最も缺乏を感じる工業技術家の養成と民間事業の指導啓發を計り以て化學的工業の發達を期すると共に技術的工業部工藝的産業を振興せんとするに在りて其の學科目も工藝圖案工藝彫刻金屬工藝木機工藝塗料工藝印刷工藝等の六科目を併設するに在りて豫て創立委員銓衡中なりしが廿日左の如く任命されたり

東京高等工藝學校教授工學博士 吉武榮之進

同上 安田 祿造

同上 秋保 安治